

薄氷に身のうちの瑠璃流れけり

藤田湘子

手に掬えば透明なのに深い水が青く見えるのはなぜだろう。氷も透き通ったものや薄く白濁したものなどいろいろな色を見せる。

私は、春先に薄く張った氷を見つけるとその危うさにこわしたい衝動に駆られるが、解け始めているものは簡単に割れる。水面を泳がせてみると、白い氷がかすかな青い光を発する。薄氷がまだ水だった頃の原始のかがやきだろうか。作者はそこに、作者の身のうちにある「瑠璃」のかがやきに通じるものを感じたのかもしれない。

「闊歩して詩人にならうねこじやらし」と詠んだ湘子であるが、こんな句を読むと、湘子は実に「詩人」であった、俳句は「詩」なんだと、つくづく思う。

1972年 (S47作) 第四句集『狩人』 鑑賞・野本京